

文の長さに現れた読者意識  
——日本史教科書の類似内容の対比から——

小宮千鶴子

- <目次> I 序論
- 1 調査の目的
  - 2 社会科教科書の文の長さ
  - 3 資料
  - 4 調査の方法
- II 日本史教科書の文の長さ
- 1 段階別
  - 2 トピック別
- III 類似内容の文の長さ
- 1 文が長くなる場合
  - 2 文の長さに変化のない場合
  - 3 文が短くなる場合
  - 4 比較のむずかしい場合
- IV まとめ

# I 序 論

## 1 調査の目的

同じ内容を書く場合でも読者がことなれば、それを意識した書き手は書き方を変えるのが普通である。その結果、同じ内容をことなる読者にむかって書く文章のあいだには、言語面で何らかのちがいが生じるはずである。そのちがいのある部分は、文の長さ・文の構造・語彙・表現・表記などとしてとらえられ、そのなかには文の長さや語彙量のように数量的な測定の可能なものもある一方、表現のように質的な考察がとくに必要なものもある。

小論は、ことなる読者に対して同じ内容をつたえようとする文章のあいだに生じる言語的なちがいを、文の長さの面からさぐることを目的とする。文の長さは、読みやすさ(readability)をしめす尺度の一つとしても利用され、書き手の想定する読者の読解力のちがいをよく反映していると思われるからである。また、文の長さは、今後に予定している文の構造や語彙、表現などからの分析の基礎としても重要なためである。

資料には類似する内容の文章をもちいた。資料が「同じ内容」でなく「類似内容」であるのは、現実にかかれた文章のなかで同じ内容のものをみつけるのが困難だからである。また、表現がことなれば内容もことなるという厳しい見方にたてば、「同じ内容」の文章は現実にはありえない。むしろ、実験などにより「同じ内容」に近い文章を設定することも考えられるが、そのような特殊な状況で書かれた文章には、どうしても不自然さがつきまとうという問題点がある。そのようなわけで、資料には「同じ内容」でなく「類似内容」の文章をもちいることにした。

具体的には、小学校から大学までの日本史の教科書を資料とした。教科書は、小学6年とか中学2年というように読者が指定されるので、他の文章とはことなっていて、書き手の意識する読者が明らかである。そのため、小学校、中学校というようにことなる段階の教科書を資料にすれば、「ことなる読者」の条件をよ

くみだすことができる。また、同じ科目の教科書は、前段階の内容をふまえて詳述するため、「類似内容」の点からも典型的な資料となる。さらに、日本史は、小学校から大学の一般教育科目まで幅広く指導される科目であるため、その教科書を資料とすれば幅広い比較が可能になる。このような理由から、日本史教科書を資料とすることにした。

## 2 社会科教科書の文の長さ

これまでに教科書を対象とした研究は多いが、教科書の文の長さを測定したものはあまり多くなく、とくに社会科の教科書と限定すると、さらに少ない。森岡健二(1953b, 1954)は、読みやすさの研究のなかで、小学3年・小学6年・中学3年・高校3年の国語・社会・理科の教科書各3種から、等間隔に各科目200文ずつ計600文を学年ごとにぬきだし、文の長さを測定している。その結果を学年別にみると、文の長さは、学年が高くなるにつれて次第に長くなる傾向を顕著に示す。平均文長は、小3が28.40字、小6が36.27字で、中3が43.49字、高3が46.99字である。また、教科別にみると、社会科の文がとくに長いことがわかる。

表1 教科別の平均文長

学年 教科	小 3	小 6	中 3	高 3
国 語	23.71字	31.12字	36.66字	42.33字
社 会	34.69	43.68	47.53	58.63
理 科	26.75	34.02	46.26	40.63
学年平均	28.40字	36.27字	43.49字	46.99字

小3の社会の平均文長は、小6の学年平均に近く、小6の社会の平均文長は、中3の学年平均をわずかに上まわり、中3の社会の平均文長も高3の学年平均を上まわり、高3の社会の平均文長は、高3の学年平均を10字以上も上まわっている。

山本一枝(1985)は、大学の教科書の文の長さを日本語教育の立場から調査している。山本はランダムに文をとって文の長さを調査し、経済学の平均文長が54.47字、社会学の平均文長が61.29字という結果を報告している。森岡(1953b, 1954)の高3の社会の平均文長と比較すると、大学の社会学はより長く、経済学はより短いという結果になっているが、これは森岡が高3の社会科として世界史をえらんだためではないかと思われる。

先行研究と今回の調査の相違点をまとめると、次のようになる。

- ① 森岡では平均文長のみをもとめているが、今回の調査では平均文長や文の長さの分布を数量的におさえたのち、具体的な例文にあたりながら平均文長と教科書の段階との関連をきめこまかく見ていく。
- ② 森岡や山本では、教科書からかたよりなく文をとるために、ランダムに文をぬきだしているが、今回の調査では、文の内容を重視して類似内容の文を資料とする。
- ③ 森岡では社会科教科書の文の長さを段階的におっているが、「社会科」の具体的な内容はさまざまであると思われる。高3の場合は世界史との注記があるが、小3、小6、中3の社会科教科書の具体的な内容は、不明である。また、山本の使用している大学の経済学や社会学の教科書の内容は、森岡が高3の社会科としてとりあげた世界史とは内容的にことなる。それに対し今回の調査では、はじめて小学校から大学まで一貫して日本史の教科書を資料とする。
- ④ 森岡の調査は、30年以上も前のものなので、データとしてやや古くなっている可能性があるが今回の調査により最近の教科書についてのデータがえられる。
- ⑤ 森岡や山本では、文の長さをはかる単位として文字数もちいているが、今回の調査では、文節数もちいる。そのため、今回の調査結果を森岡や山本の結果と直接的に比較することはできないが、後述するような文節数の長所から段階間の平均文長の差がより正確に測定できる。

### 3 資料

調査の資料には、小学校から大学までの日本史の教科書を各3種ずつ計12冊もちいた。大学の場合は、小・中・高校の場合とことなり、教科書であるかの判定がむずかしいが、今回の調査では本のまえがき等に短大や大学の教養課程の教科書として利用できるとの記述があることを判定基準とした。

資料とした教科書名、および、小論での略称は、以下のとおり。

小A 大野連太郎他『小学生の社会科6上 人間の歩み』中教出版, 1990年,  
再版

小B 石井素介他『改訂小学社会6上』教育出版, 1991年

小C 石川忠雄他『小学校社会6上』学校図書, 1991年

中A 佐々木銀弥他『社会科中学新歴史 最新版』帝国書院, 1990年

中B 児玉幸多他『中学社会歴史的分野』日本書籍, 1990年

中C 青木和夫他『中学生の社会科日本の歩みと世界 歴史』中教出版, 1990年

高A 尾藤正英他『新訂日本史』東京書籍, 1990年

高B 永原慶二他『高等学校日本史改訂版』学校図書, 1989年

高C 井上光貞他『新詳説日本史』山川出版, 1990年

大A 青木和夫他『日本史』学陽書房, 1990年, 再版8刷

大B 寶月圭吾編『新稿日本史概論』吉川弘文館, 1990年, 初版27刷

大C 竹内誠他編『教養の日本史』東京大学出版会, 1991年, 初版8刷

今回の調査では、これらの教科書の本文から「大化改新」<sup>(1)</sup>「江戸幕府」<sup>(1)</sup>「明治維新」という、すべての教科書に共通して存在するトピックをえらび、さらに、そのなかでもなるべく同じ内容を述べた文を形式段落を単位として全部で350文とり出した。形式段落を単位としたのは、今回の調査の目的が表現の比較ではなく文の長さの測定にあるためで、内容をそろえるあまり文単位にして文をよせあつめるより、原文のままのまとまった文章の文の長さを測定することの方に意味があると考えたためである。

350文の内訳は、以下のとおり。

表2 段階別にみた350文の内訳

段階	文の数
小学校	64文
中学校	60
高校	75
大学	151
計	350文

表3 トピック別にみた350文の内訳

トピック 段階	大化改新	江戸幕府	明治維新	全 体
小学校	28文	13文	23文	64文
中学校	29	13	18	60
高校	29	27	19	75
大学	95	30	26	151
計	181文	83文	86文	350文

## 4 調査の方法

### 4-1 文の長さをはかる単位

文の長さをはかるおもな単位には、文字数と文節数がある。<sup>(3)</sup>文字数を単位とする立場には、波多野完治(1935)などがあり、文節数を単位とする立場には桑門俊成(1949)などがある。

文字数を単位とする理由としては、①文字が日本語の文章意識の要素になっていること、②文節のように学説による認定のゆれがないこと、③文節数とくらべて測定に時間や労力がかからず大量調査に適していること、④文節数との相関が高いこと、がある。

一方、文節数を単位とする理由としては、①文字数にかぞえられる句読点のうち方に一定したものがないこと、②送り仮名法も一定していないこと、③同じ事物を仮名で書くか漢字で書くかを規制する本質的な理由がないこと、④言表の際に文字数を考慮するのは特別な場合にかぎられること、がある。

波多野(1965)は、文字数を単位とすることに対する桑門からの批評をとりあげ、一部分は賛成であるとのべている。ことに、200字から500字程度の文章をぬきだして細かく調査するときには、文字数だけではなく文節数でもはかった方がよいが、大量調査には測定のやさしい文字数の方が適しているとしている。<sup>(4)</sup>

文字数と文節数それぞれの立場の意見をまとめると、より正確な文の長さと

いう点からは文節数を単位とすべきであるが、大量調査の場合には測定についてやす労力や時間も無視できない要素となるので、文節数と文字数に高い相関があるならば、測定のやさしい文字数を単位とした方がよいと言えよう。

今回の調査の場合、資料は350文で大量調査とまではいかないこと、資料が小学校から大学までの教科書であることから漢字と平仮名の書きわけに段階性が予想されること、後に同じ資料によって文の構造を調査して文の長さとの相関をみようと考えていることから、文の長さをはかる単位として文字数ではなく文節数を使用することにした。

#### 4-2 今回の調査でもちいた文節の認定基準

今回の調査では文の長さをはかる単位として文節数をもちいたが、その認定は、基本的には国立国語研究所『雑誌用語の変遷』の「長い単位」<sup>(5)</sup>の基準にしたがい、必要におうじて一部あらためたり、つけくわえたりすることにした。

つぎに、今回の調査でもちいた文節の認定基準を、(1)「長い単位」の基準にしたがったもの、(2)「長い単位」の基準をあらためたり、つけくわえたりしたもの、に大別してかかげる。ただし、「長い単位」の基準中にあっても、今回の調査に必要ななかったものについては省略する。

##### (1) 「長い単位」の基準にしたがったもの

原則 長い単位としては原則として文節を採用する。

文節の認定上問題になる形式については細則にしたがう。

例) 1615年には | 大阪城を | 攻めて、 | 豊臣氏を | ほろぼした。

細則 1 付属語(助詞・助動詞)の範囲は国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞』の目次にあがっているものとする。

例) 蘇我本宗家は | 亡んだものの、  
家康を | 政権から | 排除する | ため、

細則 2 自立しうる体言的な形式(単独で、あるいは付属語をつけて、文節としてもちいられうる体言的なもの)が、直接的な関係をもちながら2つ以上ならんでいる場合には、原則としてつづける。

例) 美濃<sup>^</sup>関が原 権力<sup>^</sup>奪取の | 機会  
大化の | 国政<sup>^</sup>改革<sup>^</sup>運動は 大坂城<sup>^</sup>攻撃を | 命じた  
ただし、つぎの場合は切る。

a) 対等な関係にある場合のうち、あいだに区切り符号があれば切る。

例) 全国を | 国・ | 郡・ | 里に | 分け、  
公卿・ | 諸侯・ | 役人を | ひきいて  
ただし、直前直後に、その形式全体に関係する接辞や体言的な形式があればつづける。

例) 軍事・<sup>^</sup>交通<sup>^</sup>制度 君臣・<sup>^</sup>父子・<sup>^</sup>夫婦<sup>^</sup>間  
畿内<sup>~</sup><sup>^</sup>東海<sup>^</sup>地方 1614<sup>~</sup>15年

b) 対等な関係にない場合のうち、つぎの場合。

① 肩書きや続柄と人名などの連続の場合。<sup>(6)</sup>

例) 大臣 | 蘇我馬子 大王 | 輕皇子 三男 | 秀忠

② あとの形式が数詞で、まえの形式の数量を規定している場合は切る。

例) 領地を | 没収した | 大名 | 87家

(注意) 数詞が順序数・番号をしめし、まえの形式がその基準(あるいはその属するもの)をしめず場合は、つづける。

例) 3代<sup>^</sup>將軍 1868年<sup>^</sup>3月<sup>^</sup>14日

③ 代名詞と、これと同格の名詞との連続は、切る。

例) かれら | 父子 これは | 一連の | 政策

細則3 つぎの形式は、指示のとおり扱う。

### 3. 1・《連用形式+用言》

こう<sup>^</sup>して こう<sup>^</sup>した

### 3. 2 コソアドを含む形式

その<sup>^</sup>後 それ<sup>^</sup>以後 これ<sup>^</sup>以後 それ<sup>^</sup>以外  
これ<sup>^</sup>まで これ<sup>^</sup>より (時) この<sup>^</sup>ような この<sup>^</sup>ように<sup>(7)</sup>

3. 3 つぎのような形式はそれだけでは1文節を構成しない。

例) -当時 大化<sup>^</sup>当時 -以来 戦国時代<sup>^</sup>以来  
-はじめ 7世紀<sup>^</sup>はじめ -あまり 260年<sup>^</sup>あまり



-そのもの 内容^そのもの

(2) 「長い単位」の基準をあらためたり、つづくわえたりしたもの

原則の例外 歴史上の事項をしめす語は、2文節以上からなるものでも、また、細則により語の内部がさらに切れる場合でも、全体で1文節とする。

例) 関ヶ原の^戦い 五箇条の^御誓文 公地・^公民

細則4 2文節以上からなる形式(意味解釈上から2文節としたものをふくむ)全体に関係する接辞あるいは体言的な形式は、「長い単位」ではその前あるいは後を切るが、今回の調査では臨時一語の調査を今後に予定しているため、切らない。

例) 物資・|力役の|徴発|事業 → 物資・|力役の|徴発^事業  
 方広寺の|大仏|建立 → 方広寺の|大仏^建立  
 今川氏の|支配|下 → 今川氏の|支配^下  
 将軍の|世襲|制 → 将軍の|世襲^制

細則5 文頭に順序数がかかる場合は、その順序数の直後で切る。

例) (2)| 都の|制度と|評などの|地域支配の|しくみを|つくる。  
 3 | 戸籍・|計帳・|班田収授法の|設定。

細則6 長い文のなかに短い文(相当のもの)がふくまれる場合は、長い文の方を文と認める。つまり、文の数は句点の数と一致しない。

例) それは、|(1)|皇族や|豪族の|私有地・|私有民を|廃止して|  
 公地公民と|し、|その|かわりに|食封などを|支給する。|  
 (2)|中央・|地方の|行政区画を|定め、|軍事・交通制度を|  
 ととのえ、|中央集権制を|しく。|(3)|戸籍・|計帳を|つくり、  
 |班田収授法を|おこなう。|(4)|調などの|新しい|  
 税制を|定める、と|いう|もので|あった。

細則7 かぎ(「」)につつまれた引用部分は、国立国語研究所『専門語の諸問題』の基準<sup>(8)</sup>に準じ、長くても全体で1文節とする。

例) 「凡田長州歩、広十二歩為町。段租稻二束二把。町租稻廿束。」と|い  
 う|条文が|ある。<sup>(9)</sup>

## II 日本史教科書の文の長さ

### 1 段階別

#### 1-1 平均文長

資料の総数は350文であるが、それを小学校から大学まで段階別にわけて平均文長をもとめると、表4のようになる。

表4 段階別にみた平均文長(1)

段階	文の数	平均文長
小学校	64文	10.8文節
中学校	60	13.3
高校	75	15.3
大学	151	15.8
全体	350文	14.3文節

表5 段階別にみた平均文長(2)

段階	文の数	平均文長
小学校	64文	10.8文節
中学校	59	12.5
高校	72	14.4
大学	151	15.8
全体	346文	14.0文節

表4によると、小学校の10.8文節がもっとも短く、中学校13.3文節、高校15.3文節、大学15.8文節と、予想どおり段階をおって文が長くなる傾向がわかる。

ただし、よくみると、小・中学校間の平均文長の差は2.5文節もあるのに対し、高校・大学間の平均文長の差は0.5文節しかない。それは中学と高校の「大化改新」の文のなかに、4項目からなる「改新の詔」の各項をつぎの例のように文の形でつないで1文とする極端に長い文がまじっているからである。そのような特殊な文が中学・高校の平均文長をおしあげ、小・中学校間の平均文長の差をひろげる一方、高校・大学間の差をちぢめたものと思われる。

例) それは、①私有地・私有民を廃止して公地公民とし、豪族には食封をあたえる、②京・畿内と地方の行政区画を定める、③戸籍・計帳をつくり、班田収授の法をおこなう、④新しい税制を実施する、というもので

あった。(高B)

そこで、この例のような文(中学1文, 高校3文)を350文から除外し, 346文の平均文長をもとめたのが表5である。

特殊な文をのぞくことで、平均文長は小学校10.8文節、中学校12.5文節、高校14.4文節、大学15.8文節という結果になった。このように段階があがるにつれて平均文長が長くなるのは、森岡の調査結果と一致する。段階間の差をみると、小・中学校間が1.7文節、中学・高校間が1.9文節、高校・大学間が1.4文節と、特殊な文をとりぞくことで差が小さくなり、表4のようなかたよりはなし。以下、計算はすべて346文を対象とする。

### 1-2 文の長さの分布

平均文長が同じであっても、文の長さの分布は文章によりさまざまである。極端に長い文や短い文がまじってその中間ぐらいに平均文長がおちつく場合もあれば、同じような長さの文ばかりがあつまって平均文長になる場合もある。小学校から大学まで段階をおって平均文長が長くなることはわかったが、個々の文の長さはどのように分布しているのだろうか。

つぎに文の長さの分布にかかわる数値をまとめて表6にかかげる。

表6 文の長さの分布にかかわる数値

指数 段階	総文数	平均文長	文長標準偏差	文長最小値	文長最大値	文長中数	文長最頻値
小学校	64	10.8	4.4	3	22	11.0	12
中学校	59	12.5	6.2	4	34	11.0	10,14
高校	72	14.4	6.0	3	36	14.0	12
大学	151	15.8	6.9	3	44	14.0	13,14

\*「総文数」以外の単位は文節。

文長標準偏差は、平均文長からのへだたりの平均をさす。小学校がやや離れた値をしめすが、他の3段階は近い値になっている。

文長最小値は、中学校の4文節をのぞいて他の段階はすべて3文節である。平均文長が段階的に長くなっても、文長最小値には影響がないようである。

文長最大値は、文長最小値とは対照的に、小学校22文節、中学校34文節、高校36文節、大学44文節と段階をおって長くなっている。しかし、細かくみると、もっとも大きな伸びをみせるのは小・中学校間の12文節で、ついで高校・大学間の8文節、中学・高校間は2文節しか差がない。これは段階間の差が次第に小さくなる平均文長の伸び方とは対応しない。

文長中数は、文を長さの順にならべたとき中央にくる文の長さをいう。小学校11.0文節、中学校11.0文節と、小・中学校ともに同じ値をしめし、高校・大学もともに14.0文節である。中学校以上の段階では、すべて文長中数が平均文長よりも短い。

文長最頻値とは、もっとも高い頻度をしめす文の長さをいう。小学・高校の文長最頻値はともに12文節、中学校は10文節と14文節、大学は13文節と14文節である。小学校は平均文長よりも長く、高校・大学は平均文長より短い。中学は2つの最頻値のあいだに平均文長がある。

つぎに、小学校から大学までの各段階の文の長さの分布を図1～4にしめす。全体の傾向をつかむため、横軸の文の長さは4文節ずつにまとめてある。縦軸の度数は、各段階の総文数がことなるので、百分率に換算して相対度数にしてある。

図1 小学校教科書の文の長さの分布

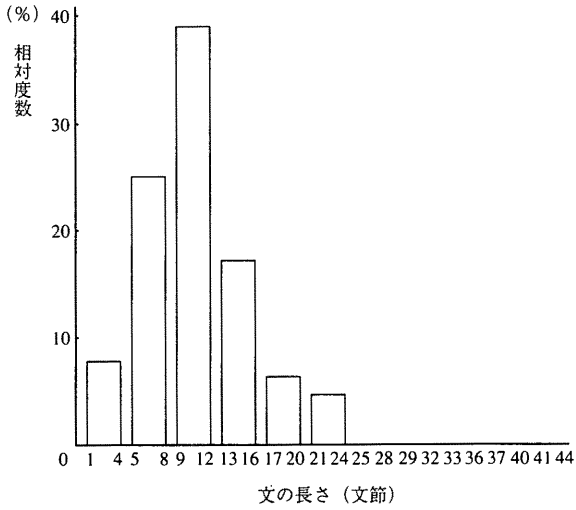


図2 中学校教科書の文の長さの分布

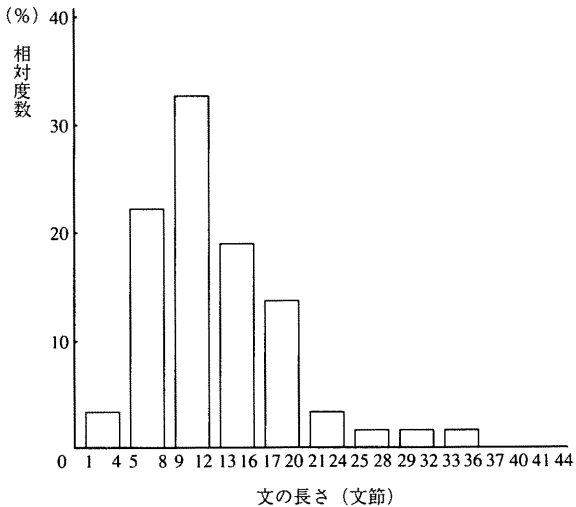


図3 高校教科書の文の長さの分布

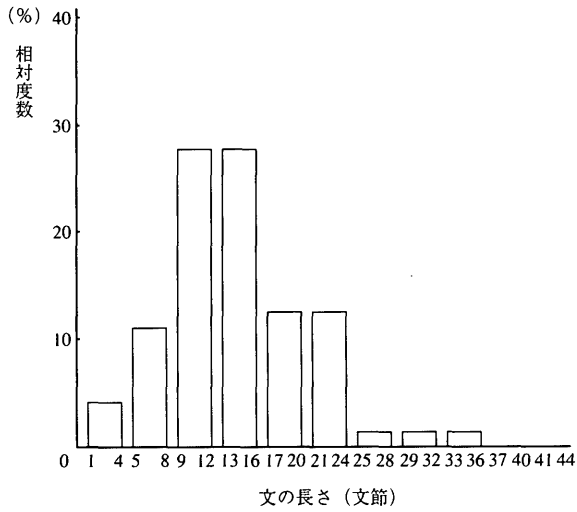
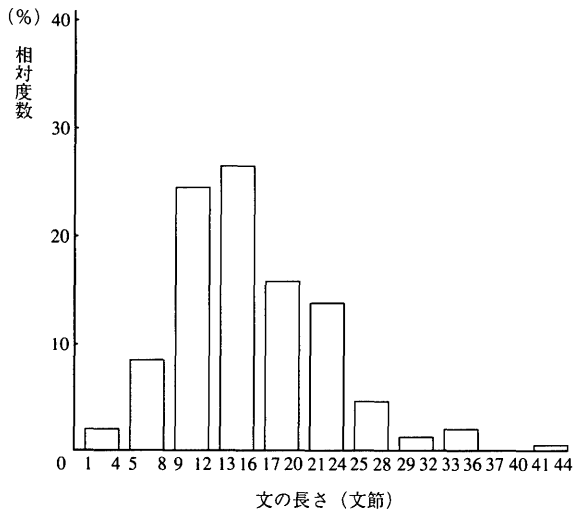


図4 大学教科書の文の長さの分布



つぎに4段階の文の分布を比較するために、それぞれの分布を折れ線グラフにして図5にまとめた。

図5 各段階の文の長さの分布

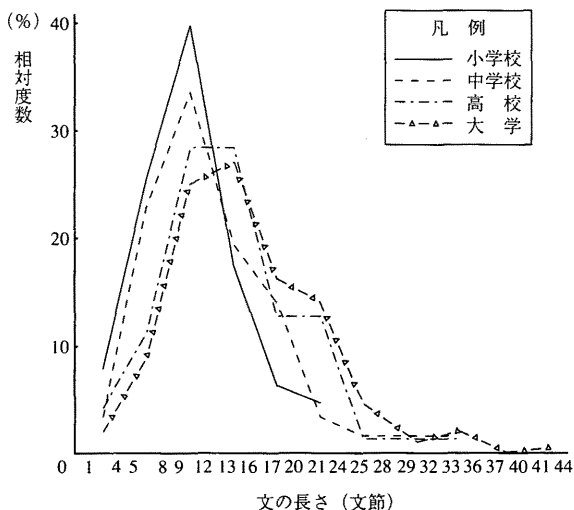


図5から、小学校では鋭い峰のような形をしていた分布が、中学・高校と峰が低くなる一方で、裾野が右の方に広がり、大学ではなだらかな丘のような形になることがわかる。つまり、小学校では文の長さの幅が3文節から22文節までの20文節のなかにあり、文長最頻値の相対度数も40%近くに達するが、中学校以降は文の長さの幅が中学校31文節、高校34文節、大学42文節と段階をおって広がり、文長最頻値も右にずれつつその相対度数は20%台にまでさがるのである。

つぎに4段階の文の長さの累積相対分布を図6にかかげる。

図6 各段階の累積相対度数の分布

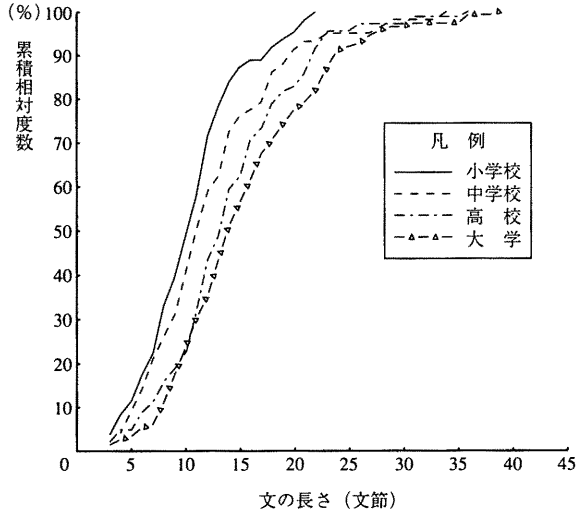


図6から、小学校の分布がせまい幅のなかでもっとも急なカーブをえがき、中学校以降は段階をおって幅が広がるとともにカーブもなだらかになることがわかる。つまり、下の段階ほど少ない種類の文が全体の多くの割合をしめるのである。

以上から、段階別にみた文の長さについてまとめると、つぎのようになる。平均文長は段階をおって長くなることが、今回の調査においても確認された。また、平均文長をつくりだす個々の文の長さの分布を段階別にみると、段階があがるにつれて長い文の種類がふえて文の長さのバリエーションが豊かになること、全体のなかで長い文のしめる割合が高くなることがわかった。これらが平均文長ののびをささえているのである。

## 2 トピック別

つぎにトピック別に平均文長をもとめたのが表7である。



表7 トピック別にみた平均文長

トピック 段階	大化改新	江戸幕府	明治維新
小学校	11.0文節	9.1文節	11.6文節
中学校	13.2	10.5	13.0
高校	14.7	13.9	14.7
大学	15.5文節	16.8文節	15.4文節

表7から、「大化改新」「江戸幕府」「明治維新」のいずれにおいても段階があがるにつれ、平均文長が次第に長くなることがわかる。つまり、平均文長とトピックとのあいだに相関はないと考えてよい。

3つのトピックにわけると各トピックごとの資料の数がへるため、トピック別に見た文の長さの分布については省略する。教科書別の平均文長ももともとてみたが、各段階の3種の教科書のそれぞれの平均文長は、長短はあっても各段階として一定の範囲におさまっており、特筆すべきことはなかった。

### III 類似内容の文の長さ

「大化改新」「江戸幕府」「明治維新」の文章は、段階をおって平均文長が長くなるが、内容の点では段階があがるにつれてくわしくなる傾向がある。ここでは類似内容の文の長さが段階の上昇とともにどう変化するかを解説する。

#### 1 文が長くなる場合

##### 1-1 1文が長くなる場合

これは段階があがっても類似内容を1文でのべる点では変化がないが、文の長さが長くなる場合である。つぎに例をあげる。文節の区切りは1字分あけ、( ) 内に教科書の略称と文節数をしめす。

1) しかし 一方では、五つの 立て札を 立て、江戸幕府と ほとんど

同じように、民衆の動きをとりしまりました。 (小C, 11)

2) 一方、庶民に対しては五榜の掲示を出し、江戸幕府と同じように儒教の道徳をすすめ、農民一揆やキリスト教をきびしく禁止しました。 (中A, 14)

1) は小学校教科書からの文で11文節、2) は中学校教科書からの文で14文節で、段階の上昇とともに文が長くなっている。両者は文全体として類似する内容をのべているが、1文中をさらに意味のまとまりにわけ、対応する部分に同種の下線を付し、対応のし方をしらべた。

文頭の「しかし一方では」(2文節)と「一方」(1文節)は、ともに前文に対する逆接をしめすが、中学校の方が小学校より短い。「五つの立て札を立て」(3文節)と「五榜の掲示を出し」(2文節)は、文節の認定基準の関係から「五榜の掲示」が1文節になるため、中学校の方が短くなる。「江戸幕府とほとんど同じように」(3文節)と「江戸幕府と同じように」(2文節)でも、中学校の方が短い。

一方、「民衆の動きをとりしまりました」(3文節)と「儒教の道徳をすすめ、農民一揆やキリスト教をきびしく禁止しました」(7文節)では、中学校の方が小学校より4文節も長い。この部分は、前述の部分とちがいが、1)と2)のあいだに同一の語や直接的な言い換えがみられないが、内容のうえから対応すると判断した。

2)の「庶民に対しては」(2文節)は、1)に対応する部分がないため、下線が付されていない。これは中学校で新たにくわわり、長くなった部分である。

1)の小学校の11文節から2)の中学校の14文節へ、文は全体で3文節長くなっているが、つぎにその変化の内訳を2)の文頭から順にしめす。

小学校から中学校へ  $-1 + 2 - 1 - 1 + 4 = 3$

このことから、増加分の3文節は、各部分の増減の最終的な結果ということがわかる。

つぎに対応が3段階にわたる例をみってみる。

3) 聖徳太子がなくなると、蘇我氏の勢いが、天皇をしのぐほど強く なりました。 (小A, 8)

- 4) 聖徳太子の死後，国内では 蘇我氏が  
勢力を いっそう 強め，太子の 一族を ほろぼすなど，  
皇室との 対立を 深めて いました。(中A, 14)
- 5) 聖徳太子が なくなると，朝廷では 蘇我馬子の 子 蝦夷と 孫の  
入鹿が 権勢を ふるい，とくに 入鹿は  
山背大兄王の 一族をほろぼして，  
専制的な 政治を おこなった。(高A, 18)

この3例でも、3)の小学校8文節、4)の中学校14文節、5)の高校18文節と、全体としては段階をおって文が長くなる。1)・2)と同様に、1文中を内容の点からさらに細かくわけ、各部分の文節数の変化をみた。

「聖徳太子がなくなると」(2文節)と「聖徳太子の死後」(2文節)は、ともに2文節で、小・中・高校間にちがいが無い。「蘇我氏の」「蘇我氏が」は小・中学校ともに1文節であるが、高校で「蘇我馬子の子蝦夷と孫の入鹿が」(5文節)と長くなる。「勢いが強くなりました」(3文節)と「勢力をいっそう強め」(3文節)は、小・中学校ともに3文節であるが、高校では「権勢をふるい」(2文節)と短くなっている。「天皇をしのぐほど」(2文節)、「皇室との対立を深めていました」(4文節)、「専制的な政治をおこなった」(3文節)は、中学校で一旦ふえたのち高校でへっている。4)の「太子の一族をほろぼすなど」(3文節)と5)の「山背大兄王の一族をほろぼして」(3文節)は、中学・高校ともに3文節で変化がない。

以上をまとめ、小学校の8文節から中学校の14文節へと6文節長くなった変化の内訳、中学校の14文節から高校の18文節へと4文節長くなった変化の内訳を、つぎにしめす。

$$\text{小学校から中学校へ} \quad 0 + 1 + 0 + 0 + 3 + 2 = 6$$

$$\text{中学校から高校へ} \quad 0 + 0 + 4 - 1 + 2 + 0 - 1 = 4$$

このことから、全体として増加した文節数は、各部分の増減と無変化の部分をあわせた結果ということがわかる。

以上の2組の例から、類似した内容の文が段階をおって長くなる場合でも、1文中を細かにみると、内容が対応する部分には、長くなる部分、変化のない

部分、短くなる部分の3種類があることがわかった。

### 1-2 文の数がへり、文が長くなる場合

これは下の段階では複数の文にわけてのべていた内容を、上の段階では1文にまとめる場合をさす。その際、下の段階の平均文長よりも上の段階の1文の長さの方が長くなる。つぎに例をあげる。

- 6) そのころ、隋や唐で学んだ留学生が帰国し、皇帝を中心とする中国の政治のしくみが伝えられました。中大兄皇子や中臣鎌足らは、日本も天皇を中心とする国家のしくみをととのえなければならぬと考えました。

(中A, 14, 11)

- 7) ちょうどそのころ、中国から帰国した留学生たちが、唐の国家のしくみなどについての知識を伝えると、朝廷の人々のあいだでは、豪族がそれぞれに土地と人民を領有し、朝廷の職務を世襲するこれまでの氏姓制度をあらため、天皇を中心とする強力な中央集権的な国家をつくろうとする動きが高まった。(高A, 36)

中学校の6)も高校の7)も、留学生によって中国の政治のしくみが伝えられたこととそれを聞いた人々の反応の2つから構成されるが、6)ではそれが2文にわかれ、7)ではそれが1文にまとめられている。文の長さは、6)の平均文長が12.5文節、7)が36文節で、7)の方がはるかに長い。7)は2つの内容をまとめた文なので、同じ内容を2つにわけた6)の平均文長より長くなるのは、当然といえるだろう。

6)と7)とは類似しているが、各段階での指導事項のちがいを反映して細かにみるといくつかのちがいが目につく。そこで、同じ内容を2文にわけ、1文にまとめるかという点だけに焦点をしぼるため、つぎのように6)の2文をできるだけ形をかえずにつないでみた。

- 8) そのころ、隋や唐で学んだ留学生が帰国し、皇帝を

中心とする 中国の 政治の しくみが 伝えられると、  
 中大兄皇子や 中臣鎌足らは、日本も 天皇を 中心とする 国家の  
 しくみを ととのえなければ ならないと 考えました。(25)

中学校教科書からとった6)と、実験的につくった8)をくらべると、8)の長さは25文節で中学校の平均文長の2倍もあり、構文もかなり複雑である。全体として、8)は6)よりも相当むずかしい文になり、読者に高い読解力を要求する。6)はその点を考慮し、中学生の読者にわかりやすく2文にわけたものと思われる。

### 1-3 文の数がふえ、文が長くなる場合

これは段階があがるとともに関連する内容がくわわって文の数がふえ、文も長くなる場合である。つぎに例をあげる。

- 9) そして、1615年には 大阪城を 攻めて、 豊臣氏を ほろぼした。  
 (中B, 6)
- 10) 一方、 豊臣氏は、 関ヶ原の戦いの のち、 65万石の 一大名に  
 すぎなく なったが、 なお 大坂城に 拠って、 秀吉から  
 うけついだ 権威を もちつづけて いた。そこで、 家康は 口実を  
 みつけて 豊臣氏を 挙兵に 追いつめ、 1614年と 翌1615年との  
 2度の 戦いに よって、 これを ほろぼした。(高A, 16, 14)
- 11) 豊臣氏は、 関が原戦後、 摂河泉65万石を 有する 一大名に  
 転落して いたとは いえ、 秀吉の 嗣子 秀頼は、 西日本に  
 おいて いまだ おとろえぬ 声望を もち、 徳川氏に とっては  
 目ざわりな もので あり、家康は 取り潰しの 機会を うかがって  
 いた。たまたま、 1614年、 方広寺の 大仏建立を めぐって  
 言いがかりを つけた 徳川氏の 挑発に、 秀頼は がまんできず、  
 全国に 呼びかけて 兵を 挙げた。しかし 従う ものは 諸国の  
 牢人だけで、 幕府は 軍令を 発し、 諸大名に 大坂城攻撃を  
 命じた。 徳川氏の 巧みな 戦法に よって 外濠を 埋められた  
 大坂城は、 1615年 落城し、 秀頼も 自刃し、 豊臣氏は ここに

亡びた。(大A, 27, 15, 11, 14)

中学校の9)は豊臣氏の滅亡という事実のみを1文でのべている。高校の10)は、9)の内容にくわえて、豊臣氏の力や戦いのきっかけという関連する内容をのべ、2文にふえている。大学の11)は、10)の内容をふかめると同時に戦いの様子をもくわえ、4文にわたっている。文の長さという点からみると、9)は6文節、10)の平均文長は15.0文節、11)の平均文長は16.8文節である。

10)の2文は単純につながると30文節になり、高校教科書の平均文長の2倍をこえる。さらに、11)の4文も単純につながると67文節に達し、大学教科書の平均文長の実に4倍をこえる。これらのことから、10)と11)は1文にまとめるのが不自然な文であるといえよう。

内容がかなり豊かになると、1文を長くするという方法では対応できずに文の数がふえるのは、自然なことである。文の数がふえる場合、ふえる文の長さの可能性には幅があるため、その文をふくむ平均文長は、もとの文より短くもなりうるが、それでもなお、全体の平均文長と同様に段階をおって長くなるのは興味深い。

## 2 文の長さに変化のない場合

これは段階があがっても文の長さに変化のおきない場合である。つぎに例をあげる。

12) この 改革を 大化の改新と いいます。(小B, 4)

13) この 改革を 大化の改新と いう。(中B, 4)

この2例は文末がことなるだけで、他は同一の表現である。これらの文に先行する大化の改新の解説部分は、小学校と中学校という段階のちがいを反映して文の長さがことなるが、解説をうけてそれに「大化の改新」という用語をあたえる文は、文の長さだけでなく表現までほぼ同じである。これは先行する解説部分を指示詞でうけ、それに用語をあたえるという文の性格からきていると思われる。つぎに、内容は類似しているが表現のことなる例をあげる。

14) 豊臣秀吉の あと 徳川家康が、 政治の 実権を にぎった。

(中C, 6)

- 15) 豊臣秀吉の 死後に 政権を にぎったのは 徳川家康で ある。  
(高C, 6)

この2例はいずれも「江戸幕府」の書き出しの1文で、文章のなかに徳川家康を導入するという機能をもつと考えられる。段階の差にもかかわらず文が同じ長さなのは、簡潔な書き出しという文の機能に関係があるのではないだろうか。

### 3 文が短くなる場合

これは段階があがって文が短くなる場合である。つぎの例は「大化の改新の詔」の説明からとった部分で、1文が短くなる場合である。

- 16) (4) 古い 税制を やめ、 田の 面積や 戸別に 割りあてる  
税などに する。(中B, 10)

- 17) 4 田調その他の 賦課制度の 改訂整備。(大B, 4)

中学校の16)では動詞文の形でのべているのに対し、大学の17)では名詞句の形でのべ、そののべ方の差が6文節も文を短くする原因になっている。

つぎの例は「五箇条の御誓文」の説明からのもので、1文が短くなって文の部分となる例である。

- 18) そこには、会議を開いて 広く意見を聞き、これまでの  
しきたりを 破って、 進んで 外国と 親しみ、世界の 文化を  
とり入れる ことなどが 述べられて いた。(中C, 18)

- 19) これは、公議世論の 尊重と 開国和親など 新政府の 国策の  
基本を 示す もので、(以下略) (高C, 9)

中学校の18)は18文節で1文の形になっているが、高校の19)ではその内容が漢語によって簡潔に9文節に圧縮され、1文を構成する部分になっている。これは短くなる程度が1文という形でとどまらずに進行し、文の一部となるにいたった例といえよう。内容の対応をおうと、「会議を開いて広く意見を聞き」(5文節)が、「公議世論の尊重」(2文節)に、「進んで外国と親しみ」(3文節)が、「開国和親」(1文節)にそれぞれなっている。

#### 4 比較のむずかしい場合

1から3まで例をあげて解説してきたが、それら3種のどれにもあてはまらない場合が実はかなりある。ここでは、そのような場合について考えたい。

類似内容をのべる場合でも、どのような内容をくみあわせて1文とするかの自由度は大きい。そのため、現実の文のなかで同じような内容を同じ順にのべる例をさがすのは困難である。さらに、文がことなれば、全体の内容が類似していても、対応しない部分をふくむのが一般的である。小論であげてきた例は、内容やそれをのべる順序という点ではそれなりに条件にかなったものであるが、6)と7)という現実の文をもちいた比較の限界から8)を作例したように、現実の文による比較にむずかしい点が多いのは事実である。

また、ある内容が1つの段階にのみあられ、他の段階には対応をもたない場合は、比較が成立しない。小学校の内容が中学校以上の段階に対応をもたない場合と、大学の内容が高校以下の段階に対応をもたない場合の2つがとくに目立つ。つぎの例は小学校の内容がその上の段階に対応をもたない例である。

20) 645年の夏、朝廷では、朝鮮からの使節をむかえて、  
おごそかな儀式が行われていました。儀式が終わりに  
近づいたころ、中大兄皇子たちは、とつぜん蘇我入鹿を  
おそい、刀できりつけました。(小B, 10, 10)

21) 上の資料を読んでみましょう。(小A, 4)

この2例はどちらも小学校らしい文といえる。20)では眼前に情景がうかぶように物語風にかかれ、21)では読者に話しかけるように書かれている。これらは、いずれも小学生である読者の理解を容易にする工夫であると思われる。ただし、このような内容は中学校以上の教科書にはあられられないため、比較はできない。

つぎの例は大学の内容が高校以下の段階に対応をもたない例で、「改新の詔」についてのべている。

22) ところで、大王 軽皇子の宮廷は、この後も転々と居をかえたが、646年正月に、新政治の要項を記したいわゆる



「大化改新詔」が 出された、と 日本書紀は 記す。しかし、4項目からなるこの「詔」は、数十年も のちの 令の 文章によって、日本書紀の 編者たちが 述作した ものなので、到底 史実性を みとめる わけには いかないのである。(大A, 18, 20)

「改新の詔」の内容は中学・高校でも紹介されるが、その史実性をうたがうような見解は高校以下ではだされ<sup>10)</sup>ない。高校まではことなる教科書でも内容的にはよく似ているが、大学の教科書は書き手による内容の差が大きい。その意味で22)は大学らしい内容といえるが、結果的に高校以下の教科書との比較ができなくなっている。

#### IV まとめ

小論は、ことなる読者に対して類似する内容をつたえようとする文章間に生じる文の長さのちがいを明らかにすることを目的とし、小学校から大学までの日本史教科書の類似内容の文章を資料として、まず平均文長や文の長さの分布をもとめ、ついでにそれらの数値の意味するものを段階のことなる具体例を比較検討するなかで明らかにした。

平均文長は、小学校から大学まで段階をおって次第に長くなることが確認された。文の長さの分布からは、段階があがるにつれ、長さのバリエーションが豊かになるとともに、特定の長さの文への集中度がさがることが明らかになった。さらに、類似内容の文の段階的な比較からは、段階があがるにつれ、文が長くなる場合だけでなく、短くなったり変化がおきなかったりする場合もあることがわかった。

文の長さに関する従来の研究は、平均文長に代表される数値をあげるにとどまり、具体的な文との関係を考察するにいたらなかったが、小論では類似内容を資料とすることでそれが可能になった。森岡(1953b)は、「言語的要素の複雑化の過程は、低学年から高学年への読解力の発達に対応しているのだと考えられる<sup>11)</sup>」とのべているが、小論は森岡のいう言語要素の複雑化の一端を明らかにできたのではないかと思われる。

ことなる読者に対して類似する内容をつたえようとする文章のあいだには文の長さのちがいが存在することが今回明らかになったが、そのような文章間におきる言語面のちがいが文の長さにとどまらないのは、いうまでもない。今後は、文の長さの調査で明らかになったことを基礎に、文の構造、語彙、表現などの面からの考察もすすめたい。

〔付記〕 研究方法や資料の選定など数多くの点につき、早稲田大学の中村明先生より有益な御助言を賜った。また、資料作成については国立国語研究所の石井正彦氏のお世話になった。記して感謝申し上げる。

〔注〕

- (1) 資料を本文にかぎったのは、本文とそれ以外の部分とのあいだに文体的なちがいの生じている可能性があるからである。同様の考えから、本文中にあっても、( )内は資料にいれなかった。また、記述の最初に記号があったり、その部分だけがとくに小さい活字になっている場合も他の本文とことなると判断し、資料にふくめなかった。
- (2) 句点でおわる文字の連続を文とした。教科書という性格からか、感嘆符や疑問符などでおわる文は、資料とした文のなかにはなかった。
- (3) 文の長さをはかる単位には、文字数と文節数のほかに音節数もあるが、あまり利用されない。渋谷(1957)は音節数での測定を報告している。
- (4) 波多野(1965)の203～204ページを参照。
- (5) 国立国語研究所(1987b)の18～23ページを参照。
- (6) ただし、「僧旻」の場合はつづける。
- (7) 「長い単位」の細則5の5.5では、文節を構成するか否かを問題にしていなかった。ここでは問題となる例のみをあげる。
- (8) 国立国語研究所(1981)の146ページを参照。
- (9) 大Aは縦書きで、「」内の漢文の部分には返り点が付されているが、小論は横書きでなので返り点は省略した。
- (10) 高Aと高Cは欄外の注で、大化改新の詔にはのちの令の文によって修飾されたと思われる部分があると指摘している。
- (11) 森岡(1953b)の115ページを参照。

〔引用参考文献〕

石井正彦 1991 「専門用語を抜き出す試み」『専門用語研究』3。

- 石森延男他1954 「教科書の文章」(座談会)『言語生活』30.
- 樺島忠夫 1953 「文の長さについて一条件と相関の分析一」『国語学』12.
- 桑門俊成 1949 『国語文体論序説』誠信書房.
- 小泉智永子1987 「日本史教科書の語彙調査」『日本語と日本語教育』16.
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- 1981 『専門語の諸問題』秀英出版.
- 1983 『高校教科書の語彙調査』秀英出版.
- 1984 『高校教科書の語彙調査II』秀英出版.
- 1986 『中学校教科書の語彙調査』秀英出版.
- 1987a 『中学校教科書の語彙調査II』秀英出版.
- 1987b 『雑誌用語の変遷』秀英出版.
- 1989 『高校・中学校教科書の語彙調査 分析編』秀英出版.
- 阪本一郎 1956 「文の長さの比重の査定法—Readabilityの研究の試み—」  
『読書科学』27.
- 志柿光浩 1992 「経済学専攻の非漢字学習者にはどんな漢字を教えればよいか」  
『日本語教育』76.
- 渋谷多文 1957 「志賀直哉の文章の簡潔さについて」『国文学攷』18.
- 土屋信一 1991 「文化語彙の探索—共出現からみた社会科教科書—」  
『共立国際文化』創刊号.
- 1992 「研究ノート 文化語彙の探索—社会科基幹語彙表—」  
『共立国際文化』2.
- 土屋信一・靄岡和夫・中野洋 1980 「高校教科書のことば」『言語生活』40
- 中村 明 1960 「平均文長の諸相—川端康成における一つの試み—」  
『文体論研究』14.
- 波多野完治1935 『文章心理学—日本語の表現価値—』三省堂.
- 1965 『文章心理学〈新稿〉』〔文章心理学大系1〕大日本図書.
- 森岡健二 1953a 「『読みやすさ』の基礎研究」『国立国語研究所年報』3.
- 1953b 「『読みやすさ』の基礎研究」『国立国語研究所年報』4.
- 1953c 「読みやすい文章とは—測定方法の試案」『新聞研究』3.
- 1954 「教科書文章の難易調査」『言語生活』30.
- 1958 「リーダビリティ」『コトバの科学』5 「コトバの美学」.
- 安本美典 1965 『文章心理学入門』誠信書房.
- 柳田利夫・小泉智永子 1989 「日本語教育と日本史—外国人のための日本史教科書の作成の基礎作業報告—」『平成元年度日本語教育学会秋季大会

研究発表要旨】。

山本一枝 1985 「大学一般教養専門書の読みの難易と文体的特徴」  
『筑波大学留学生教育センター日本語論集』1。